

中国の大学における日本語選択履修生のBELIEFSについて

－日本語選択科目の改善を考える－

李 友 敏

要 約

従来の研究の中では、教師が学習者の種々のBELIEFSを把握する重要性が指摘されている。近年来、中国における日本語選択履修生が急増しつつ、無視してはいけない存在になってきた。そこで、本稿は中国人日本語選択履修生のBELIEFSを明らかにするために、BALLIを用いて意識調査を行った。質問項目は①言語学習に対する適性②日本語学習の本質③コミュニケーション・ストラテジー④日本語学習の動機⑤教師の役割⑥学習者の自律性⑦教材・教授法・カリキュラムの設置という7領域にわたる。調査結果から日本語選択履修生のBELIEFSの傾向を窺えるのではないかと思います、更にこの調査の結果を元に、日本語選択科目の現況や問題点を照らし合わせ、どのような改善が必要かを考えていく。

【キーワード】

日本語選択履修生 BELIEFS BALLI 日本語選択科目の改善

1. 研究背景

近年、中国で日本語学習がブームになって、学習者数の急増に従い、中国での日本語教育も盛んになってきた。中国の高等教育機関における日本語教育は、専攻としての日本語教育（以下、専攻日本語教育とする）と非専攻としての日本語教育（以下、非専攻日本語教育とする）に大別できる。成（2006）によると、非専攻日本語学習者の数が64194人にも達している。中国の大学で非専攻日本語教育を受けている学習者は更に詳しく分けると以下の3種になる。

第1種は中学校以来日本語を第1外国語として勉強する学習者である。第2種は日本語を第2外国語として学習する英語学科の学習者である。これらの2種の学習者にとって、日本語は必修科目として勉強されている。

第3種は日本語を選択科目として履修している学習者（以下、日本語選択履修生とする）である。中国の大学において、外国語、経済、法律、心理学、芸術など多くの選択科目が設けられている。日本語はそのうちのひとつとして、多くの学習者に履修されるようになってきた。日本語選択履修生にとっては日本語は自由に選択できる科目である。

第3種の日本語選択履修生は数が多く、経済、社会、法律、教育学、数学、化学など様々な領域を専攻としている。また、履修生の不安定性もよく指摘されており、途中で放棄してしまう者は少なくないようである。にもかかわらず、中国の大学における日本語選択履修生は急増しつつ、非専攻日本語教育の今後の主要な対象になっていくと考えられ、無視してはいけない

存在になってきた。また、数多くの大学で、日本語は選択科目（以下、日本語選択科目とする）として学習者に履修されるようになったというのは事実である。

日本語選択科目は1クラスに当たる学習者数が多く、学習者の専攻や背景も様々である。学習期間から見れば、普通半年くらいで終わるという非常に短い時間である。担当している教師には若手教師が多く、日本人教師が配置されていないのが一般的である。また、日本語選択科目に向いている教材は少なく、しかも学習者の学習目的の多様化に対応できるとは言い難い。更に、日本語選択科目の科目設置は単一で、特に専攻日本語教育の科目と比べ、会話、聴解などの科目は一切ない。カリキュラムの設置も完備されていないように思われる。

上述したような特徴を見る限り、日本語選択科目はまだ様々な問題点を抱えていることが分かる。こういった日本語選択科目に対する早急な改善が望まれている。改善する際には、様々な要素を考えなければならないが、学習者が何を考えているかを知っておくのもその中の一つの要素だといえよう。したがって、本発表は日本語選択科目の改善の参考資料を作るため、これまであまり重要視されなかった日本語選択履修生に注目し、日本語学習についてどんな考えを持っているか、教師にどんな役割を望んでいるか、などに関わる日本語選択履修生の考え方（BELIEFS）を明らかにする。更にこの調査の結果を元に、日本語選択科目の現状や問題点と照らし合わせ、どのような改善が必要かを考察していく。

2. 先行研究

2.1 BELIEFSとは

学習者が何のために目標言語を勉強しているか、言語学習をどのように進めればより効率的に習得できると思うか、教師に何を期待しているかなどに関わる考え方のことである（張：2004）。

2.2 BELIEFSに関する研究成果

Horwitz (1987) は5領域（言語学習の適性／言語学習の難易度／日本語学習の本質／コミュニケーション・ストラテジー／言語学習の動機、計35項目）からなるBALLIを作り、成人ESL（英語学習者）の調査を行った。調査報告の中で、学習者は言語学習に関して様々なBELIEFSを持っていること、学習者のBELIEFSを把握することが重要であること、などを指摘している。

板井（1997）では、上海復旦大学日本語科の学生37名を対象に中国語版BALLIを実施した。その結果、学習者は理科系が得意な人は外国語が得意で、中国人は外国語学習に対して適性があると思い、日本語学習の動機について、「日本語が上手になりたいという強い動機の他に日本人の友達がほしい、文化背景を理解したい、話せたら仕事や専門に有利だという明確な動機を持っている」と報告している。

BELIEFS調査の目的は学習者のBELIEFSを知ることだけではなく、それに基づいて日本語教育改善の方向を探ることにあると言えるだろう。学習者のBELIEFSから日本語教育の改善を考える研究には、和田（2007）がある。

和田（2007）は、日本語を勉強しているスリランカ大学生86人を対象に、BALLI調査を行った。その結果、スリランカにおける日本語学習者は、コミュニケーション重視の教授法や教室活動、シラバスを望み、教師依存の傾向が強く、教師に強い信頼と期待を寄せているということが分かった。更に、この結果を元に、1) 信頼に足る日本語能力を持った教師の養成、2) コミュニケーション能力育成に焦点を置いた教授法導入のための教師研修、3) 様々な日本文化に触れる機会の提供、という3つ日本語教育への改善策を提案している。

和田（2007）では、BALLIを通し、学習者の言語学習に関するBELIEFSを明らかにした。しかも、BELIEFS調査の結果をある程度日本語教育の改善に生かしている。本発表では、この研究の考え方にに基づき、中国の大学における日本語選択履修生が日本語学習に関するBELIEFSを把握することで、今の日本語

選択科目の改善を考察していく。

3. 調査方法

BALLIを参考にし、大きく1) 言語学習の適性、2) 日本語学習の本質、3) コミュニケーション・ストラテジー、4) 日本語学習の動機、5) 教師の役割、6) 学習者の自律性、7) 教材・教授法・カリキュラムの設置、という7領域の中国語版調査紙を使い、調査を行う。回答方法は、各々の項目に対し、「強く賛成」から「強く反対」までの5つの選択肢から学習者自身に最も相応しいものを1つ選択させるという形で行った。

4. 結果及び考察

調査した7領域に関してそれぞれの集計結果を表にした。各々の項目において平均値や標準偏差（SD）を求めて表に記した。表1から表7までは平均値の小さい方から大きい方へ配列した。

4.1 言語学習の適性

表1 言語学習の適性についてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	ある人は外国語習得の特別な才能を持っている。	1.87	0.83
2	私には外国語学習の特別な能力がある。	3.22	0.92

表1から、外国語を勉強するとき、ある人は特別な才能を持っている（項目1：平均1.87）と認めながら、自分の外国語能力について特に強い思い込みが見られない（項目2：3.22）ことが分かる。

4.2 日本語学習の本質

表2 日本語学習の本質についてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	日本語を学習する時、最もいい方法は日本語母語話者から学ぶことだ。	2.3	0.82
2	日本語は日本で学習するのが一番いい。	2.4	0.99
3	非母語話者と日本語を話すのは意味がない。	3.7	0.89

日本語を学習する時、日本語母語話者から学ぶのが一番いい（項目1：2.3）と思う傾向が強いが、非母語話者との日本語でのコミュニケーションにも意味がある（項目3：3.7）と捉えている。これが非常にポ

ジティブなBELIEFSだといえよう。なぜかという、海外の日本語教育は日本国内の日本語教育と違い、学習者は日本語母語話者に接触する機会はなかなか見つけにくい状態なので、積極的に周りの状況を生かして、非母語話者と日本語を交わすことによって、ある程度の練習になれると思われる。

4.3 コミュニケーション・ストラテジー

表3 コミュニケーション・ストラテジーについてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	大量の反復練習が重要だ。	1.64	0.70
2	正確な発音で日本語を話すことは重要だ。	1.67	0.71
3	時間がかかってもやさしい文型から難しい文型へと徐々に積み上げて学習していく方が、最終的には実力がつくと思う。	1.82	0.68
4	単語や短い文を暗記することは重要だ。	1.85	0.66
5	カセットテープによる練習は重要だ。	1.95	0.65
6	初級の段階で誤用が許されるとしたら、後で正確に話すことが難しくなる。	2.63	1.16
7	正しく言えるようになるまでは何も言うてはいけぬ。	3.70	1.96

表3から分かるように、履修生は時間がかかってもやさしい文型から難しい文型へと徐々に積み重ねていくほうが実力がつく（項目3：1.82）と強く信じ、「大量の反復練習（項目1：1.64）」「単語や短い文の暗記（項目4：1.85）」「カセットテープでの練習（項目5：1.95）」は重要だと考えている。また、正確な発音で日本語を話すことは非常に重要だ（項目2：1.67）と捉え、「初級段階で誤用が許されるとしたら、後で日本語を正確に話すことが難しくなる（項目6：2.63）」についてははっきりした傾向が見られなかったが、やや賛成よりである。しかし、それは決して正しく言えるようになるまで何も言うてはいけぬ（項目7：3.7）というわけではない。

4.4 日本語学習の動機

全体から見れば、「日本語を上手に話せるようになりたい（項目1：1.61）」と「就職に有利だから（項目2：2.19）」という2つの動機は明らかであるが、それ以外の動機はばらつきが大きいことが分かった。履修生は日本語を上手に話せるようになりたいという強い学習動機を持っている一方、それは必ずしも日本人をより理解したい（項目7：3.15）から、日本人と

コミュニケーションをするのに役立つ（項目6：3.08）からだというわけではない。

表4 日本語学習の動機についてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	日本語を上手に話せるようになりたい。	1.61	0.66
2	日本語を学習したら、就職に有利である。	2.19	0.79
3	日本人の友達がほしい。	2.32	1.04
4	日本語が流暢に話せたら、専門に大変役に立つ。	2.56	1.05
5	日本語の文化背景を理解したい。	2.91	1.03
6	日本人とコミュニケーションをするのに役立つ。	3.08	1.01
7	日本人をより理解したいので日本語を勉強する。	3.15	1.00

4.5 教師の役割

表5 教師の役割についてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	教師に日本語の勉強方法やポイントを教えてほしい。	1.65	0.61
2	教師に自分の日本語学習上の問題点や困難な点を教えてほしい。	1.93	0.61
3	日本語学習に成功するにはいい教師が必要である	2.12	0.81
4	教師に学習到達目標を設定してもらいたい。	3.05	0.99
5	教師が学習者を一生懸命学習させなければならない。	3.50	0.91

表5のように、履修生は教師に学習方法（項目1：1.65）や問題点の指摘（項目2：1.93）などの役割を求め、日本語学習にいい教師が必要だ（項目3：2.12）と捉えている。一方、項目4と5を見れば分かるように、自分の学習プロセスを管理して学習を進めることに対して肯定的な見方を持っている。日本語学習は自分が責任を取るべきだと捉えている。

4.6 学習者の自律性

日本語を勉強する時、教師に助言を求めることが好き（項目4：2.05）で、教師の言う通り勉強すれば上達が早くなる（項目5：2.33）と信じている一方、間違いを自分でチェックする時一番学習できる（項目1：1.60）と強く賛成していることは注目すべき点である。ほとんどの履修生は「はっきりした目的」や「計

画を立てること」の重要性を十分に認識し、また、自分の日本語学習のどの部分を改善すべきかわかっている（項目6：2.37）。

表6 学習者の自律性についてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	間違いを自分でチェックする時、一番学習できる。	1.60	0.89
2	はっきりとした目的があれば上達が早くなる。	1.88	0.67
3	計画を立てて勉強すれば日本語の上達が早くなる。	2.00	0.65
4	日本語を学ぶ時、教師に助言を求めるのが好きだ。	2.05	0.69
5	教師の言う通り勉強すれば上達が早くなると思う。	2.33	0.79
6	自分の日本語学習のどの部分を改善すべきかわかっている。	2.37	1.00

4.7 教材・教授法・カリキュラムの設置

表7 教材・教授法・カリキュラムの設置についてのBELIEFS

	質 問 項 目	平均	SD
1	教科書はもっと実生活に近いほうがいい。	1.67	0.60
2	自分がもっと日本語で話したい。	1.81	0.66
3	教科書以外のものも教えてほしい。	1.88	0.88
4	会話中心のカリキュラムがもっともいい。	2.22	0.82
5	日本語を読んだり書いたりする授業より、日本語を話したり聞いたりする授業が望ましい。	2.33	0.86
6	教科書を使わず口頭だけの練習は自分に向かない。	2.36	1.10
7	テキストに基づいた授業がいい。	2.88	0.89
8	日本語を上手に話せたり聞けたりするようになるには、今の授業だけでは十分である。	3.72	0.84

履修生にとって、日本語を読んだり書いたりする授業より、話したり聞いたりする授業が望ましく（項目5：2.33）、会話中心のカリキュラムが最もいい（項目4：2.22）。しかし、今の授業だけでは、自分の日本語を上手に話せたり聞けたりするようになるには十分（項目8：3.72）ではなく、自分がもっと日本語で話したい（項目2：1.81）という強い傾向が出てきた。一方、教科書がもっと実生活に近いほうが有難く（項目1：1.67）、教科書以外のものも学びたい（項目3：

1.88）という強い要望を持っている。また、「教科書を使わず口頭だけの練習は自分に向かない（項目6：2.36、SD（1.10）」についてばらつきが見られるが、やや賛成よりという結果になっている。これに対し、「テキストに基づいた授業がいい（項目7：2.88）」について、半分近くの学習者は「どちらでもない」を選んだ。

5. 履修生のBELIEFSと日本語選択科目の改善

中国の大学における日本語選択履修生のBELIEFSの傾向をまとめると、以下ようになる。

- ①教師を必要としている一方、主体的学習を望んでいる傾向も強かった。また、履修生の学習への自律性が非常に高いことが分かった。
- ②多くの履修生は文型積み上げ型、反復練習型などの伝統的な学習方法に慣れているが、コミュニケーション重視の教授法やカリキュラムを望んでいる傾向も強かった。
- ③教科書はすべてではないが、履修生のよりどころで、彼らを安心させる不可欠な存在になった。
- ④日本語は母語話者から学ぶのが一番いいと思う傾向が強いが、非母語話者との日本語でのコミュニケーションにも意味があると捉えている。

以上のBELIEFSの特徴を元に、今の段階で考えられる改善案を以下のように挙げてみる。

- 1 学習者の主体的認識や自律性を生かせる授業の開発
- 2 伝統的な教授法を尊重しながら、コミュニケーション重視の教授法の導入
- 3 日本語を話す場の提供

6. 今後の課題

本発表では、これまであまり重要視されなかった中国の大学における日本語選択履修生を対象に、BELIEFS調査を行った。今回の調査はBALLIを使ってアンケート調査を行った。BALLI調査研究で必ず問題になるのが、各項目に対する意味解釈が被調査者によって同じとは限らないという点と、調査結果に対する考察はあくまでも筆者によって解釈しているという点である。より客観的な解釈ができるように、アンケート調査の後、フォローインタビューなどを行う必要がある。これは今後の課題とする。

参考文献

- [1] 板井美佐（1997）「言語学習についての中国人学習

- 者のBELIEFS－上海復旦大学のアンケート調査より－」
『筑波大学留学生センター 日本語教育論集12』筑波大
学留学生センター 63-87
- [2] 張美淑（2004）「第二外国語として日本語を学ぶ韓
国の高校生の日本語学習についてのピリーフー教室での
応用に向けて－」東京外国語大学修士論文
- [3] 橋本洋二（1993）「言語学習についてのBELIEFS把
握のための試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論
集8』筑波大学留学生センター 215-241
- [4] 若井誠二・岩澤和弘（2004）「ハンガリー人日本語
学習者のピリーフス」『日本語国際センター紀要』第14
号 国際交流基金日本語国際センター 123-140
- [5] Horwitz Elaine K. (1987). Surveying Students Beliefs
About Language Learning. 103-117. In Anita Wenden & Joan
Rubin (eds.), *Learner Strategies in Language Learning*. USA:
Prentice-Hall, 119-132

り ゆうびん／北京日本学研究中心日本語教育コース M3
liyuminjp@yahoo.co.jp